



## 漫画『美味しんぼ』騒動に関する雑感

福永 久典

Fukunaga Hisanori

現在、相馬市の病院で働いている。東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故後、医療ボランティアの一員として被災地を訪ね、特に相馬市の被害を肌で感じる機会があり、その復興に協力したいと思ったからだ。

相馬市は福島県浜通りの北部に位置しており、地震、津波、そして原発事故によって多くの住民が被害に遭った。相馬市内だけでも、地震で多くの建物が倒壊し、津波によって一瞬で数百名の命が失われた。震災後3年以上経った今も市内の仮設住宅に数千人が暮らしている。福島第一原子力発電所からはわずかに40 kmの距離しかないが、空間線量は決して高くはない。しかし、原発事故後の福島県内の被災地の風評被害はあまりにも甚大であり、漁業や農業など相馬市を長年支えてきた産業が立ち直る気配はいまだにない。

週刊ビッグコミックスピリッツ2014年5月26日号(5月12日発売)に掲載された『美味しんぼ』第604話「福島の真実23」は福島県内の被災地にとって正に衝撃であった。被災地では鼻血を出した人が増えており、その理由が被ばくによって鼻粘膜の細胞が障害されるためであるとして鼻血と被ばくとの関係性を論じ、最終的には福島県からの住民の避難を勧めるという内容であった。鼻血を出した主人公に対し

て、前 双葉町長である井戸川克隆氏が「私思うに、福島に鼻血が出たり、ひどい疲労感で苦しむ人が大勢いるのは、被ばくしたからですよ」と発言する場面は印象的だ。さらに「私はとにかく、今は福島に住んではいけないと言いたい」という発言もあった。井戸川氏は町議会から不信任決議を受けて辞任したが、主人公たちは「真実を言う」と町長を辞めさせられるこの日本という国は……と憤りを見せる場面もあった。理系の感覚からすると「真実」という言葉は客観的に使うべきだが、この漫画の中での真実はとても主観的なものであるように思う。少なくとも井戸川氏の発言が真実であると支持する客観的な根拠は乏しいように感じる。真実というよりもあくまで“井戸川氏の推測”と表現すべきではなかったか。

掲載後、福島の風評被害を助長するという批判は当然あったが、『美味しんぼ』の作者である雁屋哲氏は、井戸川氏だけでなく、福島県住民、専門家などへの取材を念入りに行った結果、このような描写を行ったのだと反論した。たしかにラジカルが細胞を障害するメカニズムを解説する場面があるなど、経歴からして放射線生物学を大学などで学ばれてはいないであろう雁屋氏が描いたにしては、少し専門的と思える内容も含まれており、ある程度の取材を行っ

てから鼻血の描写をしたのは恐らく事実だろう。しかし、CT、PET-CTなどの放射線画像診断、頭頸部腫瘍に対する放射線治療などにより被ばくした患者が鼻血を出すのを見たことがない臨床医の立場からすると、美味しんぼ仮説は、正直、荒唐無稽にすら感じた。

現在、臨床医学的にある程度の信頼性をもって言えるのは、被災地でストレス性疾患が増加したというデータだけだと思う。実際、公立相馬総合病院耳鼻咽喉科（当時）の長谷川純医師の報告によると、めまい症、メニエール病、低音障害型感音障害など耳鼻咽喉科領域のストレス性疾患で公立相馬総合病院を受診した患者数は震災後1年目に例年の約1.3倍、2年目に約1.5倍に増加したという。同様に被災地でのストレス性疾患増加を示す報告はほかにもある。たしかに、震災後、仮設住宅で暮らす方々などを含めると被災者たちが感じてきたストレスは、恐らく尋常ではない。ストレス性疾患が増えているという推測は、被災地の臨床に携わる者としても、感覚的に頷けるものがある。しかしながら、それらの報告を鵜呑みにして、被災地でストレス性疾患が増加していると容易に結論できるわけではない。ストレス性疾患の増加が真実であるかどうかを含めた被災後健康影響に関する論議は、今でもとても慎重に続けられている。このような検討・吟味が科学的に妥当な結論に近づくのには欠かせないからだ。

振り返ると、美味しんぼ仮説が一般に知られ

る前に、科学者による十分な批判的検討・吟味が欠かせなかったのではないかと思う。もしも専門家による監修が行われていたら、漫画のストーリーは変わっていたかもしれない。しかし、今回、その科学的な過程を経ている内容が、あたかも福島の実態を捉えているかのように喧伝され、独り歩きしてしまった。ある種の扇動になってしまったといっても過言ではないかもしれない。そして、少なくない読者たちが内容を盲目的に信じた結果、実際に観光客の減少など新たな風評被害が福島県内の被災地を直撃し、復興の気運を挫くに至った。

我が国の言論の自由を鑑みれば、雁屋氏が福島の実態を語ろうとする自由はあるのではないだろうか。もちろん、作者なりに真摯に取材し、作者なりに被災地の現状を憂いているのだろう。そして、作者が福島をどのように論じるかは、福島県民の生活を脅かさない限りは、ある程度自由なのではないかとも思う。しかし、自由とは責任を伴うものではないだろうか。今回の美味しんぼ騒動は雁屋氏がどこまで意図していたものか明らかでないが、結果として、新たな風評被害を招いた責任が作者にあると主張する者たちもいる。実際、被災地に生じた風評被害に対する責任は誰に属するのだろうか。作者か、出版社である小学館か、あるいは誰も責任を感じてはいないのだろうか。福島の実態を語ろうとした者たちの今後の動向に注目したい。

（公立相馬総合病院）